



京機短信

KEIKI short letter

No.374 2022.11.05

京機会(京都大学機械系同窓会) tel. & fax. 075-383-3713
E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp
URL: http://www.keikikai.jp
編集責任者 京機短信編集委員会

目次

- ・ series わたしたちの研究 (20) 熱材料力学研究室……中部主敬、巽 和也、栗山怜子 (pp.2-8)
- ・ series 125周年を迎えて……加納 学、牧 功一郎、山下直輝、花崎秀史、沖野真也、安達真聡、平山朋子 (pp.9-15)
- ・ 祝125周年 京都大学とジョージ・セル……吉田英生 (pp.16-20)
- ・ 酒処伏見と奈良電鉄……吉田英生 (pp.21-30)
- ・ 樋口季一郎中将……藤川卓爾 (pp.31-37)
- ・ 昭和43年(1968年)入学—昭和47年(1972年)卒 卒業50周年記念同窓会……秋山雅義 (pp.38-39)
- ・ 聚楽と美しい鴨川……編集人 (pp.40-42)

11月5日(土) 桂キャンパスでは京都大学機械系工学教室125周年祝賀会・記念講演会と京機会総会が開催されます。京機会総会は3年ぶりの対面開催となり、実際にお会いしてお話ができる第一歩として教室一同楽しみにしております！

行事予定

研究室見学(午前10時～正午)	於桂キャンパスC棟
京機会総会(午後1時～午後2時)	於船井哲良記念講堂
記念式典(午後2時半～4時)	於同講堂
記念講演会(午後4時～5時半)	於同講堂
祝賀会	於ザ・サウザンド京都

桂キャンパスC棟



船井哲良記念講堂

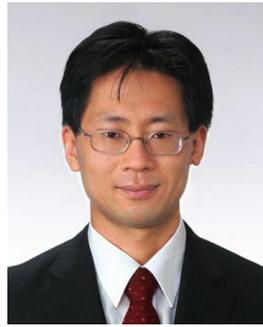


桂キャンパス会場へのアクセス方法は[こちら](#)

わたしたちの研究 (20) 熱材料力学研究室



中部主敬
(S56/1981卒)



異 和也
(H9/1997卒)



栗山怜子
(H22/2010卒)



1. 研究室の生い立ちと教員の紹介

熱材料力学研究室 (MTFM Lab.: Mechanics of Thermal Fluid and Material Laboratory) は工学研究科機械理工学専攻の機械材料力学講座に属して、機械工学群の大学院教育研究に、また、工学部物理工学科の機械システム学コースの学部教育に携わっています。

大学院重点化改組による京都大学機械系教室の改編が平成6(1994)年に行われた後、平成17年度には機械工学専攻、機械物理工学専攻、精密工学専攻、航空宇宙工学専攻の4専攻が新しく機械工学群として、機械理工学専攻、マイクロエンジニアリング専攻、航空宇宙工学専攻の3専攻に再編されました。私たちの研究室(熱材料力学分野)は、その際に機械理工学専攻の研究分野の一つとして新設され、平成18年4月に中部主敬が教授として、異 和也が助手として着任しました。その後、平成22年に異 和也が准教授に昇任し、平成28年に栗山怜子が助教として着任し、現在に至っています。

中部主敬は機械系教室の伝熱工学研究室(佐藤俊教授)出身で、昭和56(1981)年に機械工学科を卒業し、昭和58年に機械工学専攻修士課程修了後、大阪大学の助手として採用されました。当時は博士学位を持たずとも、教員(文部教官)を務めながら論文博士として学位を取得可能でした。その後、前出の重点化改組が行われる平成6年に母校に戻る機会を得て、熱流体工学講座伝熱工学分野の研究室(鈴木健二郎教授)で助教授を務めていましたが、平成14年に大阪府立大学(現大阪公立大学)へ教授として異動しました。平成18年には前出の新3専攻体制下で

設置された現研究室に異動となり、再び母校に戻ることができました。

その間、大阪大学では機械工学科燃焼工学研究室において、燃焼反応に伴う各種ラジカル自発光と燃料油滴からのミー散乱を同時計測する手法およびその画像化方法を確立し、「液体燃料噴霧の燃焼特性と火炎構造に関する研究（平成2年度、工学博士取得）」などを行いました。平成3年からは約1年半の間、NIST（National Institute of Science and Technology）で招聘研究員として、スペースシャトル搭載用火災実験モジュール検討のための微小重力下における可燃平板の着火、燃焼に関する数値解析を行いました。本学伝熱工学研究室では衝突噴流や流路内構造体後流の伝熱特性の解明、ニューラルネットワークを利用した壁温分布の可視化技術開発などに取り組み、大阪府立大学ではエネルギー機械工学科のエネルギー機器学研究室において、マイクロガスタービン燃焼器や燃料改質器、伝熱フィンに関する研究、マイクロ流路内熱流動に関する研究などを行ってきました。

本章のタイトル右端にあるアイコンは私たちの研究室のロゴマークです。真ん中の赤い丸印は「Energy（エネルギー）」のEを絵文字とし、それに翼を付けて熱力学で学ぶガスタービン記号をデフォルメしたものを考案し、それを大阪府立大学時代の研究室ロゴとして使用していました。そのロゴを現在の熱材料力学研究室に異動した際に、「therm-（熱）」のTHで時計台前の樟を象ったものの中に埋め込みました。研究室メンバーが学会発表などを行う際に使ってもらっています。

巽 和也は前出の伝熱工学分野の研究室（鈴木健二郎教授）出身で、平成9年に機械工学科を卒業、平成11年に機械工学専攻修士課程を修了し、同専攻博士後期課程に進学して平成15年に「屈曲壁面やリブ付設壁面を持つ流路内の熱流動特性に関する研究」で博士（工学）の学位を取得しました。その後、科学技術振興事業団（現科学技術振興機構）研究員として大阪府立大学エネルギー機器学研究室（中部主敬）での共同研究に従事し、平成15年10月に大阪府立大学の助手として採用されました。平成18年には本学に戻り、熱材料力学研究室で助教を、平成22年からは准教授を務めています。これまで、超小型熱流体機器の実現に向けて、ミリ・マイクロ・ナノスケールの伝熱・反応制御技術およびマイクロ流体デバイスの開発と、その熱・流体・力学的性質に関する基礎と応用研究を行ってきました。小型熱・エネルギー機器では伝熱・反応促進に向けた流路構造の設計と新たな伝熱媒体として粘弾性流体を利用した研究を行っています。また、マイクロ流

路内の流れ・輸送機構を明らかにし、それらを制御する要素技術として、ポンプ・センサ、粒子と細胞の整列・同期・分取機構の開発を進めています。これらに関連して血球・血流・血栓のダイナミクスの解明、および血球の運動と輸送のモデル化を目指した実験的検証と解析・理論的検証も行っています。一方、ブラウン運動による蛍光偏光解消を利用した液体温度計測、サーモリフレクタンスイメージング法による固体表面温度計測など、マイクロスケールの光学温度計測技術の開発を行っています。

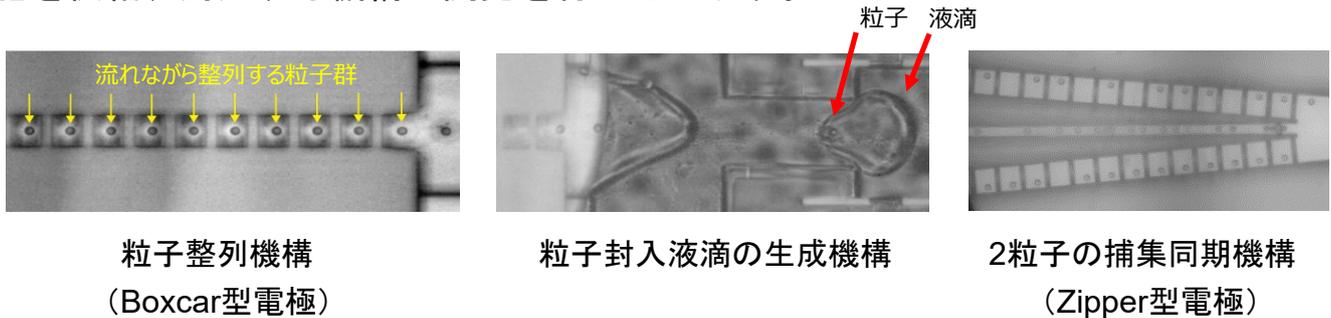
栗山怜子は慶應義塾大学工学部システムデザイン工学科の出身で、平成22年に卒業し、平成24年に同大学院理工学研究科総合デザイン工学専攻前期博士課程、平成27年に同専攻後期博士課程を修了し、「ラマン散乱イメージングによるマイクロスケール熱流動場の非侵襲計測」に関する研究で博士（工学）の学位を取得しました。同年、（株）堀場製作所に入社し、開発部にてFT-IRエンジン排ガス分析装置の開発に関わった後、平成28年に本学に助教として採用され、熱材料力学研究室に着任しました。現在、全反射光学系背後のエバネッセント場をマイクロ流路壁面の極近傍に構築し、そこでの粒子駆動制御や蛍光利用による流体温度、粘度測定、光に反応して性質を変える化学物質を伝熱制御や流体応力計測に活用するなど、様々な光学情報を利用したマイクロ・ナノスケールの熱流動の可視化計測、制御、現象解明に関する基礎的研究に取り組んでいます。

2. 現在の主な研究

熱材料力学研究室では『熱・物質移動現象の究明とその制御技術展開』を主テーマに掲げています。高度分散発電システムで代表されるようなエネルギー・資源の高効率有効利用や地球規模の環境負荷軽減対策などにおいて、様々なエネルギー機器内の熱流動現象に関する先進的な機械工学的知恵と技術は、今後ますます重要になると考えます。また、超小型の検査・治療用診断システムのような先端医療技術開発分野においても、そのシステム内での試薬、体液、細胞などの流体・粒子の輸送・混合・反応制御技術の高度化は必須です。このような機器の開発に向け、流体どうしの混合や反応、流体と固体壁面との間の熱・物質輸送、流体中での粒子操作・輸送、熱流体センシングなどに関する基礎研究を行い、マイクロ熱流体デバイスやマイクロセンサーなどの実現を目指しています。

■ 誘電泳動力を用いた細胞整列・液滴内封入機構の開発

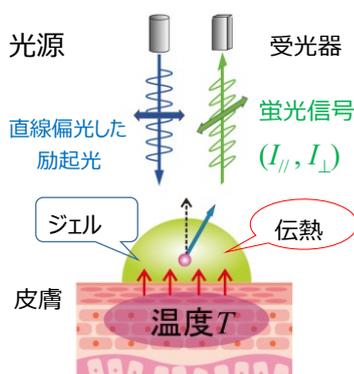
薬の新規開発等において、細胞を試薬の中に入れて効果を評価するスクリーニングというプロセスがあり、マイクロチップ上で1個の液滴に1個の細胞を封入する技術に注目が集まっています。これは細胞のスクリーニング検査を1細胞単位でできる利点があります。そこで、誘電泳動力を利用してマイクロ流路内を流れる粒子や細胞を等間隔に整列させ、1個の液滴が生成するたびにそこへ粒子や細胞を供給、封入する機構の開発を行っています。



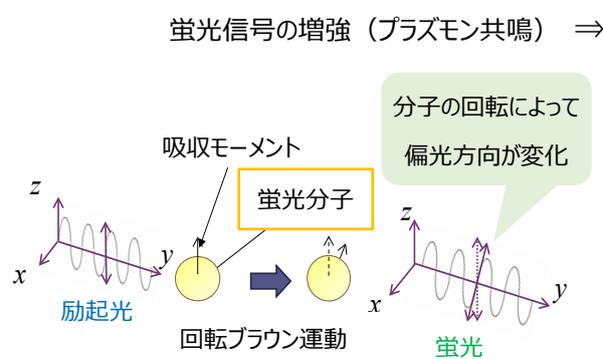
現在、球形粒子を1列に揃え、一定時間間隔で液滴が生成する領域に供給して液滴生成の周期と同期させることで1液滴1粒子封入の成功率100%を達成しました。また、1液滴に2個の細胞を封入して細胞同士の相互作用などを調べることを目的に、別々の系統から1個ずつ供給される粒子対を同時に捕集し、1液滴が生成する位相と同期させて封入する技術の開発も行っています。

■ 蛍光偏光法によるジェル型温度センサの開発

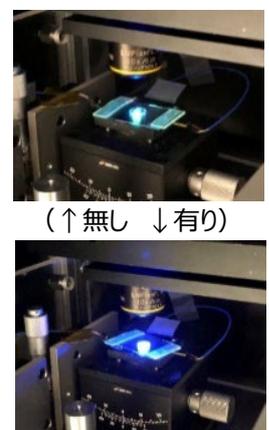
ヘルスケア分野への応用を目的にジェル状物質を皮膚に塗布して、皮膚からの分泌物をジェルに吸着させて体調を、また、ジェル自体の温度変化から体温を、同時に簡便に測定できるジェル型センサの開発を他研究室と共同で進めています。



ジェル型センサの概念図



蛍光分子の回転と偏光解消現象

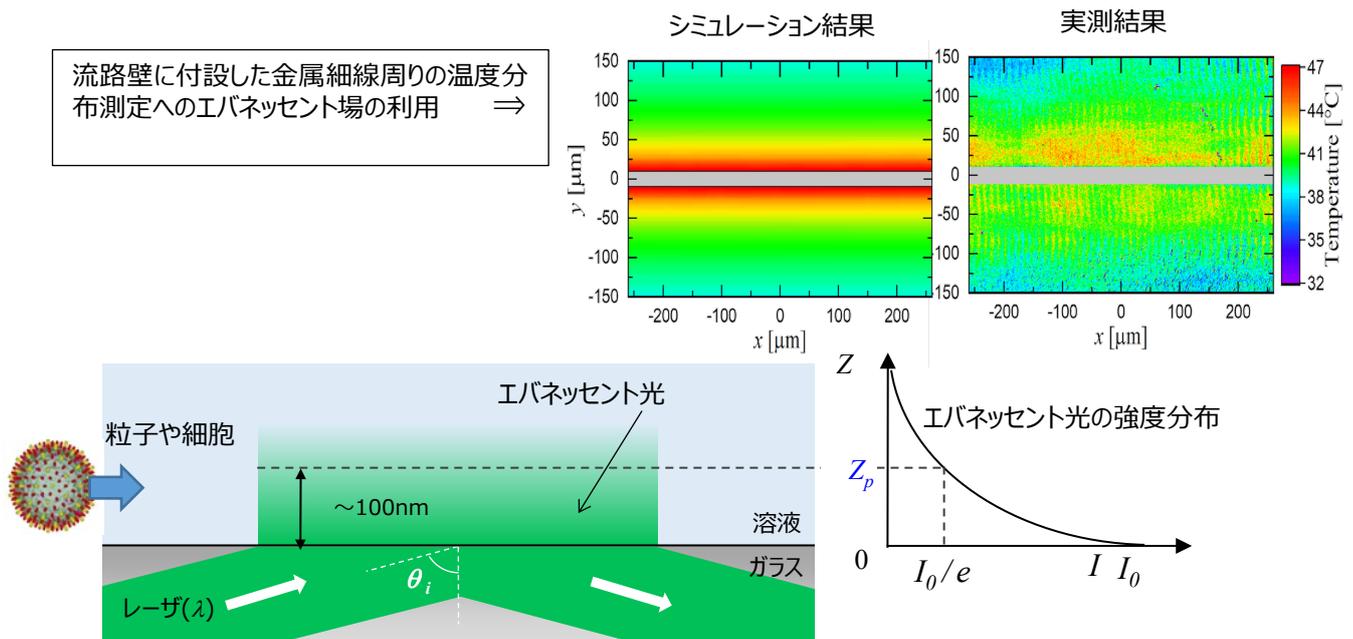


ジェル温度の測定ではジェルに混ぜ込んだ蛍光分子に直線偏光した光を照射し、

蛍光分子の回転ブラウン運動に起因する蛍光偏光解消現象を利用し、光学的に温度を測定します。また、塗布状態のジェルにおける伝熱モデルおよび蒸発モデルを考案し、温度測定時間の短縮や温度測定精度の向上を実現しています。一方で、更なる温度測定精度の向上を目指して、プラズモン共鳴を利用した蛍光の信号増幅についても検討しています。

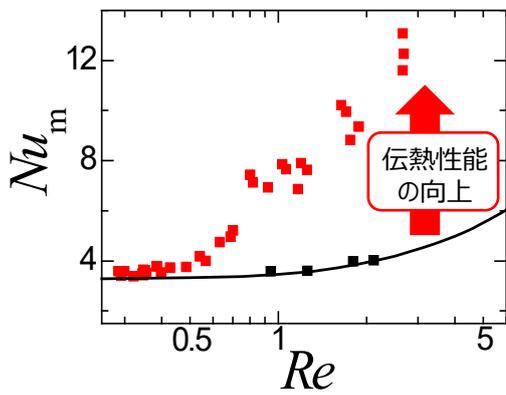
■ エバネッセント場を利用した壁面近傍計測

マイクロ流路内の流れ場では比界面積（体積に対する表面積の割合）が大きくなり、表面の影響が顕在化します。そのため、流路内の流れや化学反応を制御するには壁面近傍を選択的に注視し、その領域の温度や速度、粒子数密度などを計測することが必要です。そこで、流路壁を外部から照らす光が流体界面で全反射する領域の流体側に100nm程度の厚みで形成されるエバネッセント場を利用して蛍光分子の励起を行い、流路壁極近傍からのみの情報を高感度に獲得する計測法やその領域に存在する粒子のみを操作する手法を開発しています。

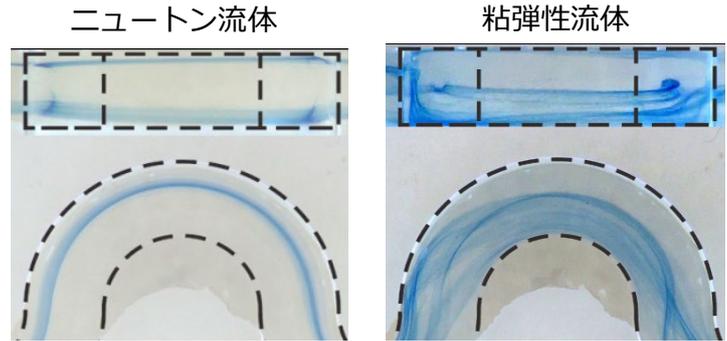


■ 粘弾性流体の伝熱促進効果に関する研究

低レイノルズ数領域でも伝熱促進効果が期待できる粘弾性流体の熱流動特性を解明し、さらにその制御を光照射で能動的に行うことを目的にPhoto-Rheological Fluidを利用した伝熱実験、解析を行っています。流れの可視化やPIV法（Particle Image Velocimetry）による流速測定、熱伝達率測定などの実験結果から、熱輸送媒体に粘弾性流体を用いた場合について、流れの非定常性の増大と主流方向断面内の2次渦により伝熱性能が向上することを明らかにしました。



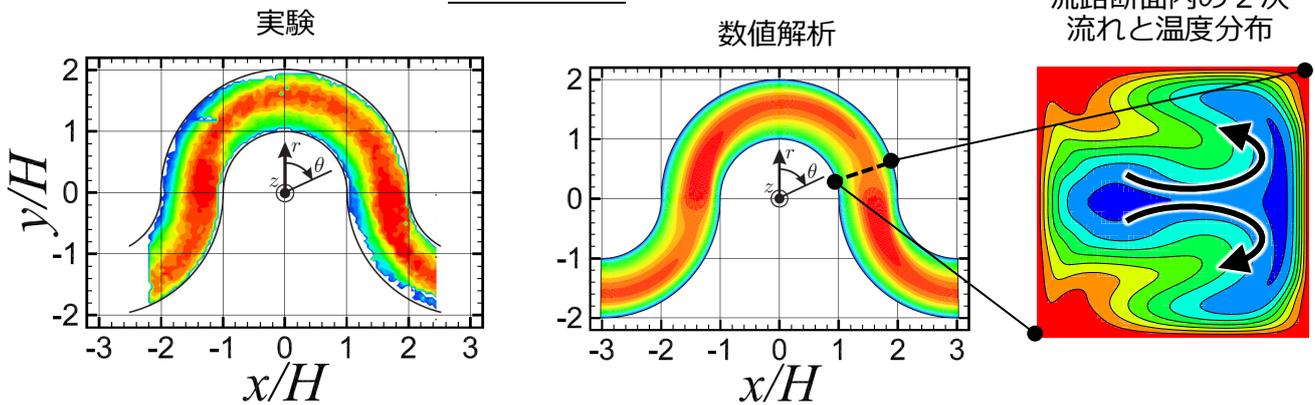
蛇行流路内流れの染料による可視化



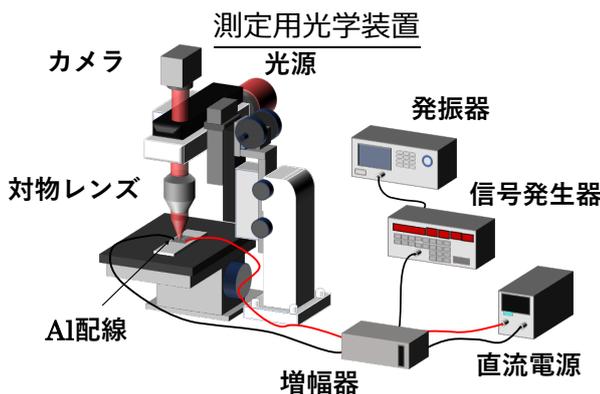
(上図) 水平方向からの画像 (下図) 鉛直方向からの画像

一方で、同様の流れ場および温度場について3次元数値解析を行い、実験の妥当性を確認するとともに、流路内の応力場や温度場を求めることによって粘弾性流体流れの伝熱促進機構を明らかにしました。

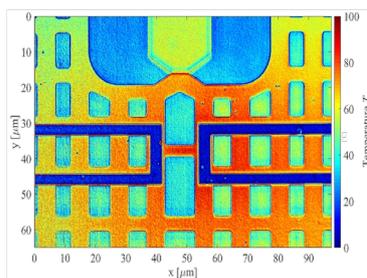
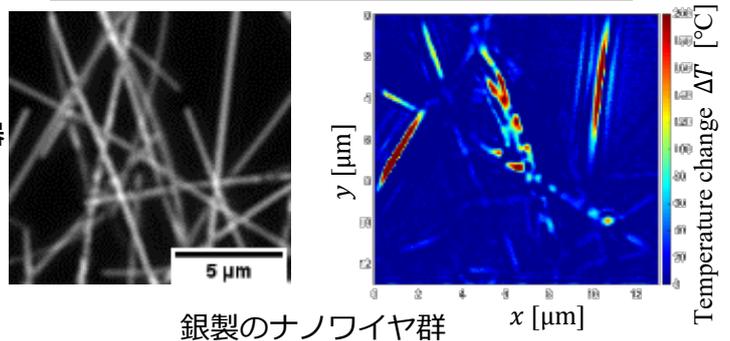
流れ場の比較



■ TRI法によるマイクロスケールの温度分布測定



温度分布測定の対象系 (左)と実験結果 (右)



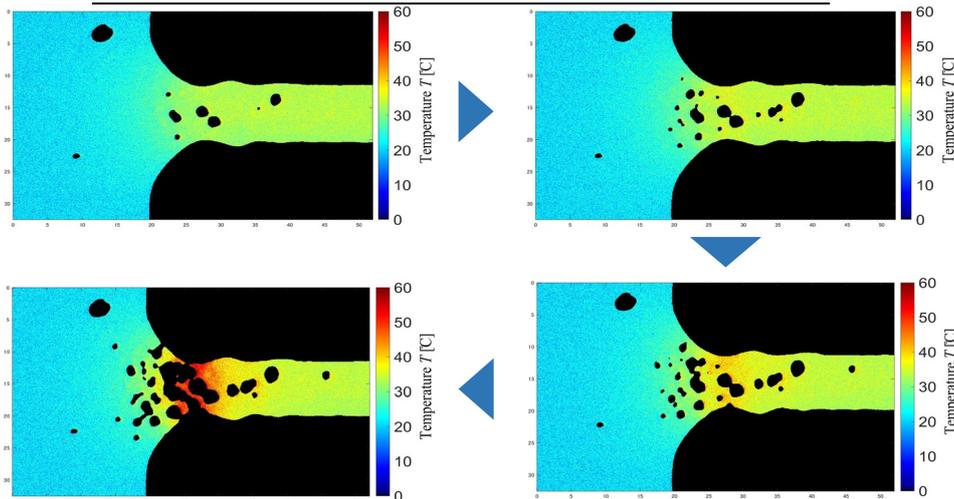
MEMS デバイス (部分) の温度分布



金製の電極から延伸する極細配線

エレクトロニクスデバイスの微細化に伴い、ミクロスケールで温度分布を測定する技術が求められています。本研究では、複雑な微細構造を持つデバイスやナノワイヤから成るネットワーク構造体などの物質が通電加熱される際に、電流経路および伝熱経路の分岐、合流による非一様な温度分布と伝熱特性を評価するため、TRI法（Thermo-Reflectance Imaging Method）を利用してナノメートルスケールの空間分解能を持つ計測技術とその数理モデルを開発しています。

極細配線内のボイドの時間的成長と高温領域の対比結果



また、高電流密度条件において極細配線上で局所的に発生するエレクトロマイグレーション（EM）現象に対しても、TRI法を利用した温度測定を適用し、ボイドの局所的な成長履歴を配線の温度分布とともに可視化する技術を開発し、EM現象解明に取り組んでいます。

熱材料力学研究室での主な研究活動は以上のとおりですが、下記のURLにも研究室の詳細を掲載していますので閲覧いただければ幸いです。引き続き宜しくお願いします。

研究室HP : <http://www.mtfm.me.kyoto-u.ac.jp>

series 125周年を迎えて

機械のわかるデータサイエンティスト



加納 学 (H4/1992卒)

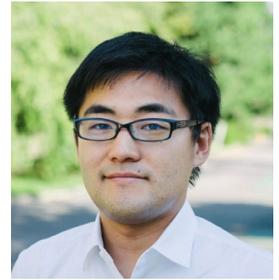
2012年2月に、情報学研究科システム科学専攻人間機械共生系講座ヒューマンシステム論分野の教授に着任しました。熊本博光先生がおられた研究室で、今も吉田キャンパスにあります。はじめて機械システム学コースのガイダンスに出席して、大きな講義室に集合した学生を見渡したときの第一印象が「女子学生、少なかっ！」でした。1988年に京都大学工学部化学工学科に入学し、1994年に修士課程を修了してからずっと助手・助教授・准教授として化学工学専攻で過ごし、女性が少ない環境には慣れていましたが、さらに少ないことに驚いたのを覚えています。現在は、女性教員比率に数値目標が設定され、未達であれば定員が削減されるという状況になっており、時代が随分と変わったことを感じます。

情報学研究科に来るまでは、プロセスシステム工学研究室（橋本伊織先生・長谷部伸治先生の下）で、主に製造プロセスのデータ解析や制御に関する研究に取り組んでいました。20～30年前の製造業ではデータを活用するという意識が極めて希薄でした。昨今は猫も杓子もDXですから、我ながら良いところに目を付けたと思います。現在は、そのような研究を継続しながら、製造現場が抱える課題を解決するために編み出してきた様々な手法を、製造設備だけでなく人間にも適用しています。少し抽象化して見れば、製造設備も人間も同じなわけです。状態を予測したい、異常を検出したいといった同じ課題を抱えています。システム工学あるいはシステム科学の本領発揮と言えるでしょうか。さらに、今年4月に着任したばかりの加藤祥太助教と一緒に、文献情報から物理モデルを自動的に構築する人工知能の実現という野望を掲げて研究を進めています。

学生には、量産型データサイエンティストではなく、機械のわかるデータサイエンティストになれと言っています。機械系教室の一員として迎え入れていただいて10年になります。創立125周年を迎えた機械系教室のさらなる発展に微力ながら貢献していきたいと思っています。よろしく願いいたします。

丁寧に、大胆に、よき一例に

牧 功一郎 (H24/2012卒)



京都大学の創立125周年に、心からお慶び申し上げます。

先日、父が大学時代に所属しておりました、マンドリンオーケストラの60周年記念演奏会に参加しました。学生の時よりもさらに？練習を積んで本番に臨んだ緊張感と、演奏のあとの安堵感が伝わってきました。

昨年、その父と実家で掃除している時に、祖父の研究ノートを見つけました。整形外科学に関する説明や考えがドイツ語で丁寧に記されており（図1）、私は直接会うことはありませんでしたが、大変几帳面な性格であったことが伺えました。父もとても几帳面ですので、はっきり受け継がれていると感じました。私は・・・(?)

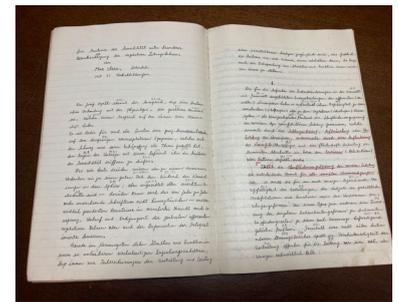


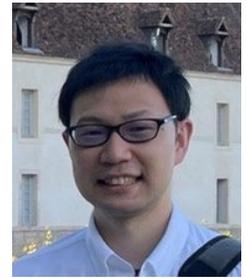
図1 祖父の研究ノート。
筋骨格や細胞という文字も。

父の祖父（曾祖父）は、豪気な性格だったようでして、研究室メンバーをよく家に連れてきて、研究談義に花を咲かせていたそうです。船でドイツに留学したという話を聞き、憧れの念を抱いていました。合成薬化学の黎明期だったようで、生体物質・材料への人工的介入・デザインという点で、面白さを感じていました。

母の家族は、琵琶湖が見える坂の上に住んでおり、小さな頃から優しく大らかに接してもらってきました。いつか、余呉湖のほとりに、フィンランド式サウナのコテージを作れたらと思っています。フィンランドに留学後、京都大学に着任してからしばらく滋賀に住んでいましたが、やはり、琵琶湖はいいですね。

今年3月に第1子が生まれました。「まわりをたすけて、まわりにたすけられる」という人間らしい活動を大切に、やさしく、日々、楽しんでもらえたらと、「祐」という漢字を使いました。私自身も、家族や周囲の皆さまとの時間を大切に、よき一例となれるように、日々、精進したいと思います。

1 ナノの後悔もない人生を



山下直輝 (H25/2013卒)

機械理工学専攻・機械機能要素工学分野の山下と申します。2019年3月にマイクロエンジニアリング専攻を修了しましたが、博士課程在学時には田畑修教授(現京都先端科学大学工学部長)のご指導の下、DNAナノ構造体や金属ナノ粒子を扱う研究に携わっておりました。2019年4月からは、機械理工学専攻の平山朋子教授の下で特定研究員を務め、他大学への赴任を経て今年4月に特定助教として着任しました。ご指導いただいた先生方には大変恵まれ、貴重な経験を積む機会を多く与えて頂いたことで研究者として大きく成長することができました。

現在はトライボロジー分野の研究に携わっています。潤滑油中には様々な添加剤分子が複数配合されますが、このわずか数ナノメートル程の小さい分子が摺動部の金属表面に吸着膜を形成したり、互いに相乗効果を生むことによって摩擦特性に劇的な変化をもたらします。私は、添加剤分子が摩擦や摩耗を抑制するメカニズムを微小摩擦力測定や、量子ビームを駆使した吸着膜の構造解析によって実験的に解明することを目指しています。トライボロジーの研究では表面で生じる現象をナノレベルで正確にとらえる必要があるため、博士課程で培った技術や知識を活かしながら自分ならではの多角的な視点から研究を展開しています。

近年、インターネットのデータ通信容量や、HDDやSSD等の記憶媒体の容量が急激に大きくなっていくのに伴い、大きさや容量を表す接頭語もどんどんスケールが大きくなっています。つい最近までは「メガ」が最大級の表現だと思っていましたが、あっという間に「ギガ」から「テラ」へと変化しました。一方で、小さいものを示す表現はまだまだ普及していないように思います。ナノスケールの事象を扱う研究に携わっている私としては、小さい方の接頭語ももっと広まってくれることを期待しています。一般的に、「1ミリも後悔していない」といった表現が使われることがありますが、私の感覚ではこれはそこそこ後悔しているな、と感じてしまいます。私は、その1/1000000である1ナノも後悔しない研究人生を送れることを願い、日々精進しております。



帝国大学の卒業論文

花崎秀史 (S59/1984卒)

私は、2004年に京都大学の機械系に助教授として赴任し、それから18年余りが経ちました。私は京大の卒業生ではありませんので、それ以前のことはほとんど知らない、というのが正直なところですが。しかしこの間、「歴史の重み」を強烈に感じたことがあります。15年ほど前、機械系の図書委員をしていた時のことです。物理系図書室（吉田キャンパスの時）から連絡があり、「最近亡くなった祖父の卒業論文を見られないか」との問い合わせが親族の方から来ている、とのことでした。特別なケースなので、図書室の担当の方が、対応を図書委員に相談されたのでした。確か貸出することはできず、遠方でもあったため、図書室の方がコピーを取ってお送りしたように思います。私は、卒業論文の実物を見ていなかったのですが、図書室の方が、送付される前だったか、私の所にコピーを持って来られました。それを見て、たいへん驚きました。第二次大戦前のものだったと思うのですが、本文は美しい手書きの筆記体の英語であり、図も定規でていねいに引かれた線が印象的でした。もちろん昔の装置の図なのですが、そんなことは全く問題ではなく、(1) 文字も図も、とにかくていねいで美しく、(私には) とてもまねのできない美しい筆記体であり、著者の卒業論文への高い思いが感じられ、(2) そもそも英語である、というものでした。旧制の帝国大学の学生は、さすがこれほど勉学に熱心で、英語もよくできたのだと、改めて感動しました。卒論をご覧になった親族の方からは、後日、丁寧な礼状を頂き、「祖父の足跡に触れることができました」とのことでした。非常によいものをご覧頂け、故人への思いを新たにさせて頂けたのではないかと、思ったものです。

現在は、パソコンで簡単にきれいなフォントで文字が打てますし、描画ソフトで楽にきれいな図ができてしまいます。しかし、どれだけの熱意を持って取り組んでいるかを考えるとき、先人の偉大さを考えずにはられません。最近、このことを思い出し、これからを担うべき学生さんに、「子孫が見ても恥ずかしくない学位論文を書くように」と言うようになりました。

エネルギーカスケード



沖野真也（H18/2006卒）

2013年に機械理工学専攻・流体物理学分野の助教として着任し、2021年からは同分野の講師を務めております。主な研究テーマは乱流です。

さて乱流とは、その名の通り乱れた流れを指し、あらゆる環境で見られる現象です。乱流を構成するのは大小さまざまなスケールの渦ですが、個々の渦の運動は極めて複雑で、一見無秩序です。ところが実際は、その運動にはある種の秩序が存在します。これを簡潔に表す気象学者リチャードソンの詩¹を紹介しましょう。

<i>Big whirls have little whirls</i>	大きな渦は小さな渦を抱え、
<i>that feed on their velocity,</i>	小さな渦は大きな渦の速度を食って生きている。
<i>and little whirls have lesser whirls</i>	小さな渦はより小さな渦を抱え、
<i>and so on to viscosity.</i>	そしてそれが粘性まで続く。

このような、大きな渦から多数の小さな渦へとエネルギーが輸送される描像を、分岐する多段の滝（カスケード）になぞらえて「エネルギーカスケード」と呼びます。そして、この、渦と渦の強い相互作用こそが乱流の本質です。

乱流と京都大学の間にはアナロジーを見出すことができます。すなわち、京都大学の教員・学生が各人の好奇心に従い自由に学理を探求するさまは、混沌とも映るかもしれません。しかし、それらの相互作用を通して「京都大学のエネルギー」とでもいうべきもの²が、親世代から子世代へ、子世代から孫世代へとカスケードされている、そのような秩序が存在するのではないのでしょうか。

エネルギーカスケードは、小渦が粘性により散逸することで終わりを迎えます。近年、大学にも次第に大きな粘性力が働きつつあるように感じられますが、「京都大学のエネルギー」を次世代にカスケードすべく奮闘したいと思います。

¹ L. F. Richardson, "Weather Prediction by Numerical Process" (1922) による。日本語訳は、木田重雄（元機械理工学専攻教授）“乱流の不思議なふるまい” (1988) からの一部改変。

² これを的確に表現する言葉を筆者はもたない。自由の学風、自重自敬、対話を根幹とした自学自習、など京大の精神を表す言葉は多数あるが、それだけでは表現しきれない何かである。

京都の街並み

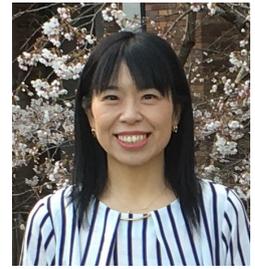


安達真聡 (H23/2011卒)

2021年から機械理工学専攻・機械機能要素工学分野助教を担任している安達です。2013年に早稲田大学にて修士号を取得後に企業へ就職しましたが、研究職への強い思いから退職して博士後期課程に進み、2017年に学位を取得しました。学位取得後はケルンにあるドイツ航空宇宙センター(DLR)にて4年程ポスドクを経験し、その後に本学へ着任しました。着任するまでは京都大学と殆ど縁もなく、また来てから間もないので何を書けばいいかなと悩んでいましたが、実は共通点の多いケルンと京都の街並みについて少し書かせていただきます。私個人の感想ですが、2つとも歴史ある古い街並みと近代的開発が融合された国際的都市であるといえます。景観保持のために建築物には高さ制限があり、歴史や文化を重んじるという観点でも同様です。市内には堂々たる川があり、それに沿った市民の生活様式が見える点や、過去に首都であった(厳密にはドイツのボンですが、ケルン/ボン空港など同一に扱われるくらい近く、DLRはその境だったので...)点などと、他にもありますが類似点が多いかと、新参者ながら勝手に京都に親しみを感じています。ケルン内を流れるライン川ですが、その上流には日本街としても有名なデュッセルドルフがあります。ライン川を挟んで西側にケルン、東側にデュッセルドルフの主要部があることから、川を挟んでライバルのような関係になっており、ケルンの住民はふざけながらライン川の東には絶対に住みたくないなどと言っています(お互いに楽しみながらです)。京都にもそのような文化や地理に根付いた冗談があれば知りたいなと思っています。ケルンも京都も魅力的な都市であり、その良さがどこから来ているのかというと文化、伝統、知恵といった先人たちの長きにわたる積み重ねだと思います。125周年を迎える機械系教室にも研究・教育などについて先輩方が築き上げてきた歴史があります。その重みと有難みを感じ、歴史の一部となれるように私も微力ながら貢献していきたいと思っています。

機械系工学教室125周年に寄せて

平山朋子 (H9/1997卒)



1997年の春、京大の大学院に入学した時のことを今でも鮮明に覚えています。東京から移り住んで来た私は、大学の近くに住むのが普通という意識がなく、山科の御陵にアパートを借りました。御陵には天智天皇のお墓があることも魅力的でしたし、路面電車で通うことが何より新鮮でした。入学に際して、その年の専攻長だった片井修先生が「矢部先生は優しいから心配しないで大丈夫」と言って下さいました。大丈夫という言葉も不思議だなと思いつつ指導教員の矢部寛先生にお会いすると、本当にそのお言葉通りのお人柄で、研究室に温かく迎えていただきました。精密工学専攻での女子学生第一号とのことで、矢部先生とのミーティングではいつも部屋のドアを開けておられました。「軸受」という古典的な機械要素に未だそれほどの検討事項があることに驚き、もう少し勉強したい思いで博士課程に進学しました。博士課程の2年修了時に矢部先生が退官されることは分かっていたのですが、3年目は久保愛三先生にお願いしておくからと何から何まで気を配って下さいました。そんな私をなんとなく不憫に思ったのか、柴田俊忍先生が「龍谷大学で公募があったよ」と教えて下さり、結果運良く採用され、京大を中退しました。たった4年間の京大生活でしたが、その間、多くの先生にたくさんのお話を教わり、とても幸せな大学院時代でした。それから長い時間を経て、「潤滑学」が「トライボロジー」になったように私の研究内容も少しだけ変わりましたが、今でも矢部先生に教わったことが全ての基本となっています。

125年という時に比べると私の4年間はほんの一瞬ですが、人生を大きく変える出会いとドラマがありました。そして京大に戻ってきた今、また違う視点で大学を眺める機会を頂いたものと思っています。一教員として、そして一卒業生として、この125年という長い時間にあっただけであらうたくさんのお話を思い出して、心からのお祝いの言葉を申し上げたく思います。そして京大機械系のますますの発展にささやかながらでも貢献できますよう、日々精進していく所存です。

祝125周年 京都大学とジョージ・セル

吉田英生 (S53/1978卒)

1. 同時期からはじまる2冊の本より

クラシック音楽CDの業界でよく繰り返されるのが、名演奏家の生誕あるいは没後なん年といったファンの心をくすぐる企画です。それで今年6月、米国クリーヴランド管弦楽団の名指揮者ジョージ・セル(George Szell)の生誕(1897年6月7日)125年という特集広告を見て、京都大学創立の同年同月18日に先行することたった11日!と気付いたのです¹。さらに、やはり生誕125年を意識してのことでしょう、セルの副指揮者を務めたマイケル・チャーリーの『ジョージ・セル——音楽の生涯』(6月23日発行、鳥影社、599頁)も続きました(原著は2011年発行)。

一方、京大125周年記念基金への筆者からの心ばかりの協力に対し、大学からは『京都大学百二十五年史 通史編』(6月18日発行、484頁)が送られてきました。

そこで、同時期からはじまるこれら2冊の本に基づいて、セルがハンガリーのブダペストに生まれクリーヴランドで生涯を終えるまでの73年間について、京大との時代対応も多少は意識しながら追ってみようという無謀(単なる両者のファンとしての自己満足?)なことを考えました。その結果が次ページに示す年表1に集約されています。左側には百二十五年史から目次の章と節だけを抜き出しました。

一方、右側にはセルの生涯から重要事項を抜粋しました(赤字は特に重要部分)。

○京都帝国大学の模索期と、セルが10歳半でピアニスト兼作曲家として楽団デビューし、将来は作曲家かピアニストか指揮者かを模索する時期が重なります。

○セルの音楽人生の半ばで最大の転機となったのは疑いなくクリーヴランド管弦楽団の音楽監督に就任したときですが、それはまさに京都帝国大学が新制京都大学として生まれ変わったタイミングと一致します。

○1970年、日本の高度成長の象徴である大阪万博の期間中(学内では「大学紛争」はとりあえず収束したものの、1960年6月23日に発効した日米安保条約10年目で自動更新期間に入ったことでストや封鎖が続いていました)、フェスティバルホールに世界の名門オーケストラが数多く来日。セルとクリーヴランド管弦楽団も5月に初来日し、20日には京都会館でもベートーヴェン交響曲第3番ほかを演奏しました。セルは、その後ソウルとアンカレッジでのコンサートを最後に、帰国後の6月10日に大学病院に入院(来日直前の4月下旬に末期癌であることを告知されていました)、6月18日に心臓発作を起こし7月30日になくなりました。

¹ 余談ながら、京都大学にも留学したドナルド・キーンさんは1922年6月18日生まれで生誕100年!

年表1 京都大学とセルの対比（73年間）

(セルの年表は前掲書を参考にして加筆しました。なお、人名・楽団名・学校名は原語で記載しました。)

京都大学		George Szell		
	1897.6.18	1897.6.7	ブダペストに生まれる。(父はハンガリー人、母はスロバキア人)	
第一編 京都帝国大学	第一章 創立期 1897-1909 第一節 創立経緯 第二節 創立 第三節 各種制度設計	1899 1903-4	2歳で、ハンガリー語、ドイツ語、フランス語、チェコ語で民謡を歌う。また、母のピアノの間違いを指摘。 ウィーンで音楽の勉強を始める。Eusebius Mandyczewskiの下で作曲と理論、Richard Robertの下でピアノを学ぶ。	
	第二章 模索期 1908-1918 第一節 沢柳事件前後 第二節 制度・組織改変などの動き 第三節 学生生活	1908 1909-10 1912 1914 1914.7.28 1915-17 1917-18	10歳半で、Vienna Tonkünstler Orchestraでピアニスト兼作曲家としてデビュー。The New Mozartと呼ばれる。 ヨーロッパツアー。Max Regerの下で学ぶ。 Universal Edition 社と十年間の作曲の契約。 17歳で、Blüthner Orchestra, Berlin で指揮者デビュー。 第一次世界大戦始まる(戦争末期1918年にチェコスロバキア建国)。 Berlin Royal Operaの副指揮者。Richard Straussとの親交始まる。 Strasbourg Operaで、Hans Pfitznerの下で第一指揮者。	
	第三章 整備期 1919-1932 第一節 制度改革 第二節 学部・附置研究所などの設置・整備 第三節 学生生活と思想問題	1919-20 1920 1924-29 1927-29 1929-37	German Opera House, Pragueの副指揮者。 Olga Bandと結婚。(1926年ごろ離婚) Berlin State Operaで、Erich Kleiberの下で第一指揮者。 Hochschule für Musik, Berlinの教授。 32歳で、German Opera House, Pragueの首席指揮者。ヨーロッパ、ソ連、イギリス、セントルイスで客演指揮者。	
	第四章 戦時期 1933-1945 第一節 滝川事件 第二節 戦時体制下の諸動向(一) 第三節 戦時体制下の諸動向(二) 第四節 敗戦前後	1933 1936 1937-39 1938 1938-39 1939.9 1939 1941-42 1942-46 1944.11 1945.12-1946.1	Residence Orchestra, The Hagueデビュー。 Royal Concertgebouw Orchestra, Amsterdamデビュー。 Scottish Orchestra, Glasgow、Residence Orchestra, The Hagueの指揮者。 グラスゴーでHelene Schultz Teltschと結婚。 複数のAustralian Broadcasting Corporation Orchestraと契約。 1日にドイツとスロバキアがポーランドへ侵攻。3日にイギリス・フランスがドイツに宣戦布告。17日にソ連もポーランドへ侵攻。1941年には日米も参戦し、第二次世界大戦となる。 New Yorkで、New School for Social ResearchとMannes School of Musicで作曲と最新の理論を教える。 Detroit Symphony、NBC Symphony、Los Angeles Philharmonic、Ravinia Festivalの客演指揮者。 45歳で、Metropolitan Operaの首席指揮者。Philadelphia Orchestra、Chicago Symphony、Boston Symphony、New York Philharmonicの客演指揮者。 Cleveland Orchestraの客演指揮者(第1回)。 Cleveland Orchestraの客演指揮者(第2回)。	
	第二編 京都大学	第一章 新制発足期 1946-1955 第一節 戦後高等教育改革 第二節 新制京都大学発足 第三節 各種体制整備 第四節 学生生活	1946.1.24 1946.10.17 1946.10.18 1949-69	49歳で、Cleveland Orchestraの正指揮者、音楽監督。 音楽監督として初コンサート：ウェーバー「オベロン序曲」、ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」、シュトラウス「ドン・ファン」、ベートーヴェン交響曲第3番「英雄」。 アメリカ市民となる。 オランダ、ザルツブルク、チューリヒの各音楽祭。
		第二章 拡大期 1956-1969 第一節 高度経済成長下の拡大 第二節 学生生活 第三節 大学紛争	1957 1957-60 1958-61 1965 1967 1969	Cleveland Orchestraの初ヨーロッパツアー。 ウィーン国立歌劇場。スカラ座のコンサート。 Royal Concertgebouw Orchestraの共同指揮者。 Cleveland Orchestraのソ連・ヨーロッパツアー。 Cleveland Orchestraの音楽祭ツアー —— ザルツブルク、エジンバラ、ルツェルン。 New York Philharmonicの音楽顧問兼上級客演指揮者。
		第三章 再編期 1970-1990 1970.3.16 湯川秀樹先生(京大創立10年後の1907生まれ)が退官講義 「大学紛争」とはとりあえず収束したもの、1960.6.23に発効した日米安保条約の当初10年の固定期間が満了し単年毎の自動更新期間に入った(1970.6.23)ことで、一部学生によるストライキや封鎖といった激しい運動が続いていた。	1970.4 5.13 5.15、16 5.20 6.10 6.18 7.30	末期癌であることを告知される。 Cleveland Orchestraのポートランド・シアトル・日本・韓国・アラスカツアーで来日。セルの万に備え、ピエール・ブーレーズも分担指揮者として同行。(なお、13日はPan Amのチャーター機が遅延し、伊丹空港夜間閉鎖のため小牧空港から名神高速道路で大阪に移動) フェスティバルホールで公演。 休日に京都では平等院を観光。 京都公会館で公演：ベルリオーズ 序曲「ローマの謝肉祭」、ラベル「タフニスとクロエ第2組曲」、ベートーヴェン交響曲第3番「英雄」。 Case Western Reserve University 病院に入院。 心臓発作を起こす。 没。

2. 小さな国ながら天才を数多く輩出するハンガリー



図1 ハンガリーと周辺諸国

年表1だけで終わりますと、単なる一ファンのメモ程度の意味しかありませんので、この機会に周辺の話——まず、セルの母国で日常的に話題になることの少ないハンガリーについて少し振り返ってみたいと思います。図1に示すように、ハンガリーは中欧には分類されますが、東欧に分類されて戦乱の続くウクライナを含め7つの国と接しています。ハンガリーの面積は日本の約1/4で、首都ブダペストから音楽の都ウィーンには北西に300キロもありませんので、ハンガリー周辺は小さい国がひしめきあっている感じです。現在の人口は1000万人弱で、アジア系のマジャル人を中心とするハンガリーでは、名前も姓・名の順に記載します。

ハンガリーで特筆すべきは、ジョルジュ・マルクスの『異星人伝説—20世紀を創ったハンガリー人』（日本評論社、2001）²にもあるように、抜きんでた人材（ほとんどがユダヤ系）を多数輩出していることでしょう。流体物理学者のテオドル・フォン・カルマン（1881–1963）、数学者のジョン・フォン・ノイマン（1903–1957）、投資家のジョージ・ソロス（1930–）など天才中の天才揃いです。

指揮者に限っても生誕順に、アルトゥール・ニキシュ（1855–1922）、フリッツ・ライナー（1888–1963）、ジョージ・セル（1897–1970）、ハンス・スワロフスキ

² 本書冒頭部分の原文が <https://mek.oszk.hu/03200/03286/html/tudos1/martians.html> に抜粋掲載されています。

ー (1899–1975)、ユージン・オーマンディ (1899–1985)、ヤーノシュ・フェレンチク (1907–1984)、ゲオルク・ショルティ (1912–1997)、フェレンツ・フリツチャイ (1914–1963)、イシュトヴァン・ケルテス (1929–1973) など枚挙にいとまがありません。その中でも、セルは“The New Mozart”と呼ばれたことでも示されるように真の天才というべきでしょう。

セルの詳細については <http://georgeszell.com/> や https://en.wikipedia.org/wiki/George_Szell などでもよく分かりますので省略させていただきますが、前掲のマイケル・チャーリーの本から、原文で以下の3つだけ引用します。

○Szell was born in Budapest of Jewish parents. His family converted from Judaism and moved to Vienna when he was three, and there he was raised a Catholic. Throughout his life Szell felt ambivalent about his Hungarian origin, claiming Czech ancestry through his mother’s side. He became a citizen of the newly formed Czechoslovakia in 1919 and of the United States in 1946, the year he became musical director in Cleveland. (Introduction)

○Szell’s most significant life accomplishment was as musical director of the Cleveland Orchestra. He raised it from the ranks of respected second-tier ensembles to the highest level of world class. The Szell/Cleveland Orchestra combination is legendary. (Introduction)

○“My aim in developing the Cleveland Orchestra has been to combine the finest virtues of the great European orchestras of pre–World War II times with the most distinguished qualities of our leading American orchestras.” (In Szell’s Words)

3. 京都でのセル



京都に到着し、ホテルでピエール・ブーレーズらと語り合うジョージ・セル(1970年5月20日)

セルは1970年5月13日にPan Amのチャーター機で伊丹空港から入国予定でしたが、遅延で夜間制限のため小牧空港に変更し、名神高速道路で大阪に移動しました。フェスティバルホールでの初日公演は5月15日でしたが、前日はカラヤンとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の公演という何とも贅沢な日々で、会場の

図2 「ライヴ・イン・東京1970」SICC-40041のライナーノートより。写真協力：ソニー・ミュージックレーベルズ

下見に訪れたセルは、リハーサル中のカラヤンと再会しました³。フェスティバルホールでは15・16日の2回（ピエール・ブーレーズが17・18日）指揮した後、セルは京都に移動して平等院を観光したのち、20日はいよいよ京都会館での公演！そのときの演奏会評が京都新聞に掲載されていたので紹介します。

京都新聞1970年5月23日（夕刊）

クリーブランド交響楽団京都公演を聞いて

浄守志郎

五月二〇日夜、ジョージ・セル率いるクリーブランド管弦楽団の演奏を聞く。セルとクリーブランドのレパートリーは広いが、なんといっても本命は、ハイドン、モーツァルト、ベートーベンからドイツロマン派にある。当夜のプログラムはベルリオーズとラベルの小品二曲とベートーベン交響曲第三番の組み合わせ。セルのきわめてきびしい完璧主義はオーケストラに対してさ細な欠点をも許さず、音楽の三要素、リズム、メロディー、ハーモニー、の構成の美しさを徹底して追求して行く態度は聞きしにまさるが、決して小細工はしない。そうかといって細かいデテールまでおろそかにはせず、率直で余計な表情などはつけない。音色は清潔で透明、アンサンブルは比類なく精緻（せいち）。ともかくセルは自己の感情を押えて客観的な構築の美しさを企図しているのだが、作品の本質、いかにすれば作曲名が音によって表現しようとしたなにもものは実に巧みにとらえているのである。

冒頭のベルリオーズの序曲「ローマの謝肉祭」ですでにこのオーケストラのなみなみならぬ卓越した個性は明示された。弾力的な主題で始まるこの曲を密度の高いパートのバランスで息づかせ、直截（ちよくさい）でありながらよくクリーンカットされた音色は、正確きわまるリズムやフレージングにうらづけられて厳正で寸分のすきもない。

ラベルの「タフニスとクロエ第二組曲」でもこの姿勢はくずれることなく物語ふうの曲を、端的に言えば純粋な音たち（無機的といえるほどの）の展開によって進行させて行く。これはわれわれ日本人が怠っているフランス感覚とは異質と思われるが、そのような郷愁を一しゅうして人間的な感情を別の世界の美学によって誇示するかのようだ。

ベートーベンの第三番は当夜の聞きどころ。セルとオケの「勘」が一体となり、計算されつくした指揮のままに実によく動き、すきのない生気にあふれた演奏であった。第二楽章のカンタービレは比類のない美しさで迫り、トリオの少し前からの高揚などは壮麗をきわめ、たたき込んでくるリズムは悲愴（そう）美を見事に昇華させる。アツェレランドとリタルダンド、クレシェンドとディミニユエンドが自然に取り扱われてすばらしい効果をあげていたことや、コーダの煙のごとく消えさる芸の細かさは印象的であった。総じてどの部分をとっても整然として、さながら大弦楽四重奏から発する音のようで、ぜい肉を取り去って凝縮した演奏はユニークというほかはない。

聞き終わって私はかつて一時代を風びしたトスカニーニとNBC管弦楽団との近似性を想起せずにはいられなかった。原作に忠実でありながらあくまでもセルの個性を出し切った演奏は、単なるザハリヒ（即曲的）なもの及ばない境地であった。どちらもヨーロッパで出来なかったことをやりとげたということに深い感慨をもった。（音楽評論家）

余談ながら、当時、筆者はクラシック音楽とは無縁の関西の中学3年生でしたが、もう2～3年早く生まれていたら、万博には行かなくてもフェスティバルホールか京都会館には駆けつけていたのと思います。その点は残念ですが、セルが亡くなる約2ヶ月前に京都を訪れて素晴らしい演奏をした——きっと京機会会員の中にも聴かれた方がいらっしやると思い、京大・京都への思いと重ねて125周年記念の拙稿とした次第です。創立と生誕をむりやり結びつけた駄文をお許しください。

³ 東条碩夫「マエストロたちのあの日、あの時」 完璧さの具現、巨匠ジョージ・セル
<https://mainichi.jp/articles/20220714/org/00m/200/001000d>

酒処伏見と奈良電鉄

吉田英生 (S53/1978卒)

1. 我、伏見を愛す —— I ♥ 243

図1 伏見の酒蔵（伏見酒造組合のHPより <http://www.fushimi.or.jp/>）

京都で住むなら何処か？ 筆者の場合、酒処伏見をおいて考えられませんでした。図1のように酒蔵がたくさんあるので町中にお酒のいい匂いが充満しているかも？とも期待しました。ま、匂いの方は酒蔵のすぐ近所を除けばなかったですが、京都でも河原町以外では三条会商店街と並んで大きな(長い)大手筋商店街には、伏見の地酒を試し呑みできるバーカウンターの店もありますし、スーパーの前には銘酒のもとになる伏流水がわき出ているところもありました。また、大手筋の商店街を抜けて西方に5分も歩くと、図2のような菜の花が美しい酒蔵も見られます。お酒自体については、16年近



図2 松本酒造(2020年4月16日撮影)

く前になりますが、当時、月桂冠の総合研究所 所長だった秦 洋二氏に“清酒造りと「熱」”というとても興味深い解説を日本伝熱学会誌に寄稿いただいたので、一読をお勧めします http://www.wattandedison.com/Heat_in_sake_brewing.pdf。

伏見の魅力はお酒だけではありません。歴史を振り返ってみましょう（月桂冠のホームページ <https://www.gekkeikan.co.jp/enjoy/> は充実していて楽しいです）。まず400年余り前、豊臣秀吉が最晩年(1593–8)を過ごした伏見は、京都一大坂¹を淀川の舟運で結ぶ交通の要衝でした。江戸時代には伏見奉行がおかれしました（近鉄桃山御陵駅の南東に西奉行町と東奉行町という地名が残っています）。また幕末、薩摩藩邸の定宿であった寺田屋²は、1866年3月9日に坂本龍馬³が伏見奉行により暗殺されかけて九死に一生を得た舞台でもあります。さらに、日露戦争末期1905年に編成された陸軍の工兵第十六大隊は、1908年に伏見奉行跡地に衛戍(えいじゅ)地を定め⁴、1936年には工兵第十六聯隊となりました。このように、伏見は秀吉以降、幕末を経て太平洋戦争まで、国内外の戦乱とも密接な関係を有してきましたので、歴史的スポットがたくさんあります。さらに、江戸時代に伏見から酒や米などの搬出および旅客を大坂と行き来させるための十石舟(漢字注意:じっこくぶね)や三十石船(漢字注意:さんじっこくぶね)は、現在もなお濠川(宇治川派流)で運行されていて酒蔵の美しい景色の中を遊覧することができます。

2. 「伏見」×「奈良電鉄」——「静岡県」×「JR東海リニア」とのアナロジー

伏見酒造組合のホームページ <http://www.fushimi.or.jp/guide/water.html> には、以下のように説明されています。「伏見は、かつて“伏水”とも書かれていたほどに、質の高い伏流水が豊富な地。桃山丘陵をくぐった清冽な水が、水脈となって地下に深く息づき、山麓近くで湧き水となってあらわれます。日本を代表する酒どころとなったのも、この天然の良水に恵まれていたことが大きな要因です。」

¹ 「大坂」を「大阪」と一元的に表記するようになったのは明治以降です。

² 寺田屋には当時の刀の傷などが残っていると以前から伝えられてきましたが、現在の寺田屋は20世紀初頭に改築されたものであることが最近明らかとなったので、注意願います。

³ 坂本龍馬は誕生日も忌日も和暦では11月15日であることに気付きました。ただし、誕生年は天保6年(当時は寛政暦のため1836年1月3日)、没年は慶応3年(当時は天保暦のため1867年12月10日)という、和暦特有の複雑なことになるそうです。

⁴ 司令部は深草(現 聖母女学院本館)でした。このため、塩小路の川端通と伏見の京町通の間を結ぶ道は師団街道と呼ばれています。なお戦後、伏見奉行跡の兵営は1959年には京都初の大規模住宅団地である桃陵団地に生まれ変わり、その南側には公務員(京大職員を含む)向けの伏見合同宿舎も2006年までありました。この辺りは愛着があり、つい詳細に記してしまいました。

その伏見酒造組合が昭和2(1927)年12月に奈良電気鉄道(以下「奈良電鉄」と略、近鉄の前身の一部)に対して抗議した出来事は、現在の「静岡県」×「JR東海リニア」とアナロジーとも言えるでしょう。伏見の立地の特殊性に加え、時の特殊性——大正天皇崩御のため昭和3年11月に昭和天皇が御大典(即位の礼)で京都から橿原神宮に移動することも加わって、極めて興味深い展開になります。以下、奈良電鉄の社史(1963)から元号で表示してまとめてみます。

図3に示すように、奈良電鉄は、大阪電気軌道(略称は大軌、近鉄の前身の一部)の奈良線西大寺と京都を結ぶべく、まず西大寺・小倉(伊勢田)間について、昭和2年9月に着工したのち順調に昭和3年9月に完成させます。一方、当初、

小倉以北は東方の京阪宇治に向かって京阪電鉄に乗り入れ、中書島経由で京都に向かう路線を計画しましたが、遠回りのため国鉄奈良線と比べてメリットがないということで、小倉から北上して伏見に至る伏見支線に変更します(ただし変更当初は、京阪伏見桃山以北は京阪線に乗り入れ予定)。このような計画中に、大正天皇崩御という天下の一大事が発生し、それに付随して昭和天皇の御大典までの完成を視野に入れた突貫工事を強いられることとなります。

まず、淀川を渡る鉄橋付近は、前述した工兵第十六大隊の架橋演習場のため、橋脚が夜間演習の障害となり危険であるとして、単純(橋脚なし)トラス橋しか

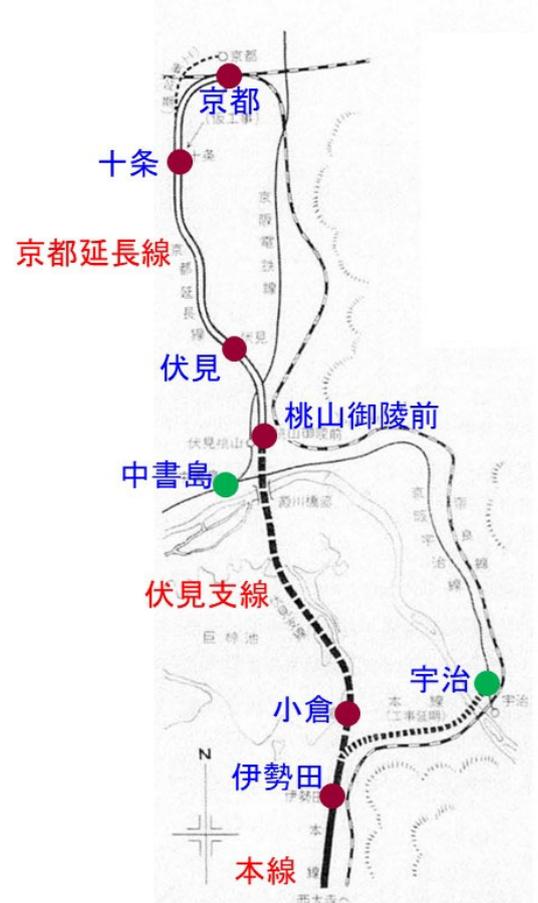


図3 奈良電鉄のルート(奈良電鉄社史より)

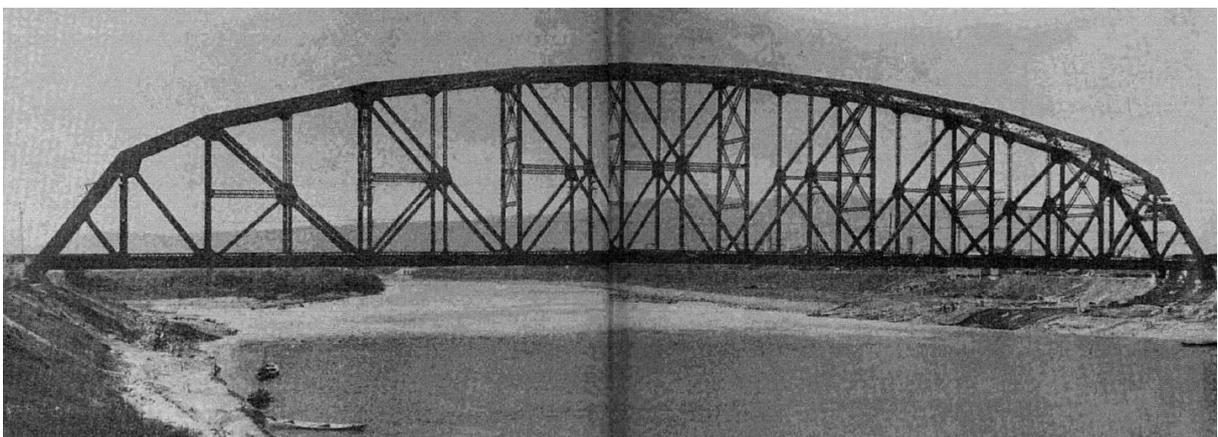


図4 淀川橋梁(径間164.6m、中央高さ24.4m、全重量1839トン)(奈良電鉄社史より)

許されませんでした。また、伏見の商業地帯を用地買収するのは困難である上、桃山御陵参道との平面交差が京都府から許されなかった（注：少し西側の京阪京都線は明治43年開通なので、当時は桃山御陵もなく問題ありませんでした）ため地下線とすることを計画しました。ところが伏見酒造組合は、醸造用地下水の水脈が切断され、水量の枯渇減少、水質の変化などをきたすことがあれば、醸造伏見の死活問題であるとして、鉄道省へ地下線反対の陳情をするとともに奈良電鉄に対しても強力に阻止運動をしました。このときに、京都帝国大学理学部の松原厚教授は、伏見酒造組合から依頼されて行った研究成果を「伏見町の地下水に就いて」という論文（醸造學雑誌、昭和4年、以下に序文）で報告しています。これらの結果、伏見付近は京都地方で最初の高架線とすることを余儀なくされました。

伏見町の地下水に就いて

京都帝国大学理学部教授 理学博士 松原 厚

伏見町には未だ水道の設備がないので、家庭用竝ならびに工場用の水は總すべて之を井戸に需もとめなければならぬ、従つて井戸水の良否と其湧出量の如何とは、直接に町民の喉頸を抑へて居る重要問題である。然るに、先年奈良線の鐵道敷設に當り、東方の山際が一部掘鑿くつきくせられた爲め、同町の東南部特に桃山御陵道附近の井戸水は頓とみに減却した。又東方の斜面地に於ける新築家屋の増加も近年特に著しくなつた、是等の原因により次第に在来の井戸は涸渇に瀕し冬期酒造用水が盛に汲み上げらるゝ期節になれば、一般民家の井戸は干上つて了ふものも相當多數に上る始末で、前途誠に樂觀を許さない事態に立到つて居る。

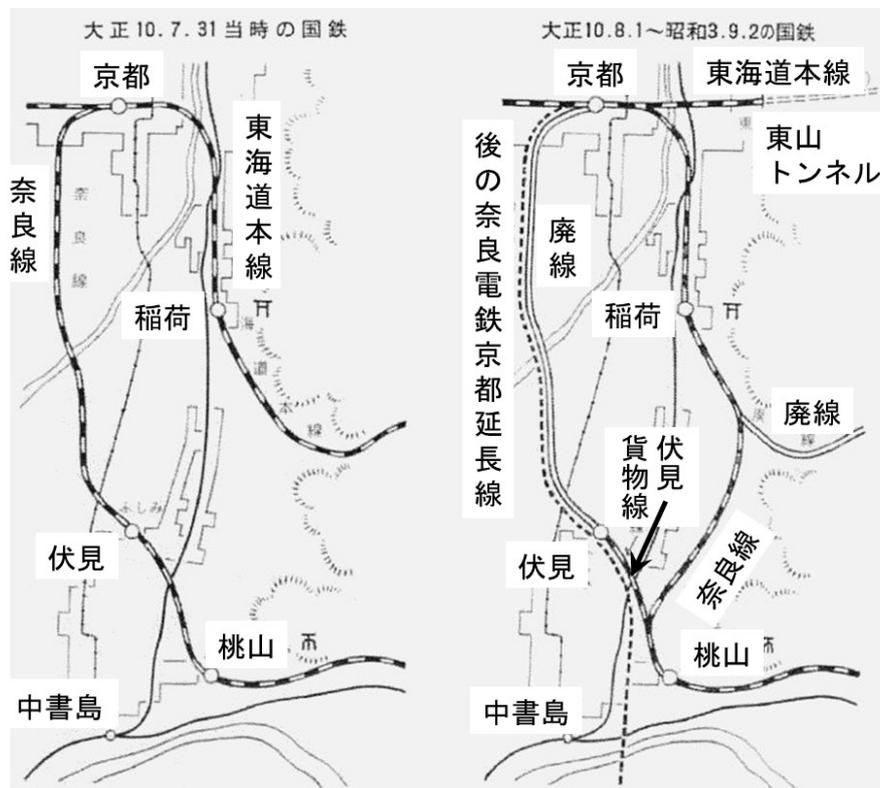
此時に當り、又々町民に不安を感じしむる一問題が起つた。それは、昭和三年の春、奈良電氣鐵道が同町の東方を通過することになり、大手町御陵道を直角に横斷する地下墜道トネルが設計されたことである。此結果、井戸水に對して最も大なる危懼を感じたのは主として町の東南部一帯の民家であるが、此方面には酒造用水を供給する井戸が多い爲めに殆んど全町の酒造業者が齊ひとしく不安を感じることになつた。

著者は今春來伏見稅務署竝に伏見酒造組合其他の援助を得て、同町に於ける一般地下水の性質、配給状態竝に酒造用水の成分等に関して或種の調査を遂げ、且前記の豫定地下墜道が井戸水の配給に及ぼす影響に就いて或種の測定を行ふ機會を得たので本紙に其梗概を報告することゝした。蓋し各地に於て之に似寄つた問題は屢々しばしば起り勝ちのことであるから、其調査に當らるゝ人々の参考に資すると共に、方法の當否或は便不便等について讀者の批評を仰ぎ度いが爲めである。

(論文全文は http://www.wattandedison.com/matsubara_fushimi_1929.pdf 。国会図書館オープンアクセス <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10390593?tocOpened=1> から抜粋。)

前述したように、伏見支線から北側は当初、京阪線に乗り入れる案でした。しかし、線路容量の不足が明らかとなったため、奈良電鉄が自社で京都延長線を建設することになりました。これは、[図5](#)のように大正10年に東山トンネルが開通して東海道本線が現在のルートになり、京都・稲荷間が国鉄奈良線として新たに転用された結果、廃線となった旧奈良線の京都・伏見間と伏見貨物線を国鉄から払い下げてもらい敷設しなおす（狭軌→広軌）ことにより、効率的に行われました。

[表1](#)に西大寺・京都間の突貫工事の記録をまとめました。西大寺・小倉間の本線以外は、すべて昭和3年着工で御大典直前に完成という、ものすごい早さです。あらためて当時の日本人のパワーと集中力に圧倒されますね！



[図5](#) 国鉄線のルート変更（奈良電鉄社史より）

[表1](#) 突貫工事の記録（奈良電鉄社史より）

線別	区間	着工(S3年)	竣工(S3年)
京都延長線	京都—伏見	7月20日	10月
	伏見—桃山御陵前	9月3日	11月12日
伏見支線	桃山御陵前—淀川右岸	6月2日	10月
	淀川橋梁	4月1日	10月16日
	淀川橋梁—小倉	4月	10月
本線	小倉—西大寺	(S2年)9月	10月
本社事務所(伏見町御幸宮門前)		7月	10月

邦坊 奈良電道中記

注一、「12」（戸籍統一文字番号

900110）は「え」で代用した。

注二、明らかな誤植と思われる字

は訂正した。

注三、必要に応じルビや注を「」

で挿入した。

なら現在一時間半もかゝるところを僕なら約五十分だ、どうだ、素破らしいだらう。沿線二百余万の住民及び省線による京都奈良間一ヶ月の交通客百五十万人にとつて僕は最短交通路として大いに囁目されてゐるんだ。オイ、行かう」

とこの時の彼の聲は一層大きくなるのである、見れば頭の電流の触角から火花を散らしてゐる、おやぢが熟すると葉罐頭から湯氣を立てるやうに、超近代人であるところの電車が傾倒するとさすがに電氣の紫閃を發するらしい。危くて側へ近寄れない。

風體から見てくれ、オ、戀人の後毛の如く情熱的でやさしい緑のシーツの感触、明るきスポーツ姿の軽快さよ、！」

乗つてもらうんだね。表玄關（北口）からでも裏玄關（南口）からでもどし／＼といらつしやいとふわけた。ところで、京都は今、博覽會があるし、もう御大典で大變な人氣だよ。君、博覽會を見たかい。」

奈「僕ですか、僕が今度開通した

奈良電車ですよ、まだ、奈良電車

をご存じありませんか、へえ君は

一體誰です。」

邦「僕は邦坊です。」

奈「あ、あの呑氣者の氣紛れ者の

鼻の大きな邦坊君ですか、やあ失

敬ツ」

邦「失敬ツ」

奈「ところで邦坊君、君は汽車は

嫌ひださうだが電車はどうです」

邦「電車なら乗つても大丈夫だと

思ひますよ」

奈「ぢや、こうしよう、僕はねえ

今度開通したんだよ、僕はねえ、

乗心地もよく、速力だつて氣持ち

よく出るよ、奈良、京都間を汽車

こゝで彼が最新調の車體に充分氣取つたモダンスタイルを整へて

線一本を以て行はれてゐて、その設備、特に所要時間の點において極めて不便であるから、京都奈良を交通する客には、場合によつて寧ろ大迂回して一旦大阪に出で、友人、大軌（大阪電氣軌道）電車

彼が僕の服装を見て不平をいひ出した、

彼は京都の市電をのろい孫だつていひやがる。

奈「エヘン、つまりだね、」とやり

出すのである。

邦「抑抑（そもそも）奈良電車の

使命たるや平安の都と寧樂の都、

つまり奈良と京都を結ぶ高速度

的短距離の連絡だ、一時間半も要

した在來の不便極る汽車をから

ずして僅かに五十分で走破する

といふ頗る近代的さ。加之我が

國を創設し給ひし神武帝陵檀原

神宮と桃山の明治大帝陵を結ぶ

べく生れた新電車であるんだこ

れ吾人が負ふたる使命であり同

時に又余輩の光榮である、由來ツ」

奈「素破らしい、資本金は幾らだ」

邦「一千百五十万だ、この我輩の

代錯誤的、非文明の交通路を救ふべくけつ然として立つたのが我輩だ。同線は始發驛たる省線京都驛より直に南進して伏見桃山御

的にならないかねえ」

邦「僕はとに角これより仕方がないよ、却つて新舊の時代闘争で頑張るのが面白いぢやないか、それに却つて僕の舊式な恰好が君の

チンチン——東山二條博覽會前停留所

奈「どうだ素破らしいねえ」

邦「素破らしく派手な塗りだ、そ

れに大變な建築だねえ、三角や四

角に丸の交錯せる近代チヤズか、

厳しい守衛のあの服装が振つて

ゐるねえ、やつぱりあゝいふとこ

ろにも御大典氣分が表現されて

ゐる譚なんだよ、そうら美人が入

成されてゐる、東洋に二つとない、
ノーピーヤ [pier 橋脚] 橋つたア
此奴のことだ」

邦「なる程」

奈「感心したか」

邦「感心した」

奈「それぢや、そろ／＼出掛けや
うか」

このあたりから宇治もまぢかだ
奈良電の曰く「宇治支線は來年四
月には完成の豫定だよ」と

宇治は茶どころ茶は宇治どこ
ろ茜襪に菅笠のねえさん達が縁
まんぢゆうの葉かくれに

寝たや、ねぶたや寝た夜はよか
ろ摘んで寝た夜は尚よかる
なんて唄ふ聲が情緒的だ。

宇治にラチユム温泉があるそう
だつひで一杯浴びる。電車は湯
に入れないのでちつと立つて、

奈「オイ、湯加減はどうだ／＼」
と見てゐるだけだ、これから途中
瓦椋の池、池の周囲が三里余で、

東西三十二町南北二十七町の大
池だが新道のため二面に分岐し
て西部は水煙渺「えんびよう」と

して芹荻の情によく東部は水浅
で、紅蓮、白蓮、鬼蓮美しさは白

鳥船をうかべるに相應しい。
次は新田邊の停留所

武陵桃源を思わせる平和な村、木
津の清流に臨んで風趣また一段
とある。

奈「郊外ピクニックには好適地だ
よ」

といふ。そこに薪の一休寺がある
あの滑脱の一休禪師のみたここ
ろだそうな、和尚の居室は虎丘庵

といつて庭園が素晴らしい、世に
三作の庭と稱し彼の丈山、松花庵、
佐田川喜六の三士共同意匠にな
るところのものらしい。

方丈には高弟墨濟禪師に命じて
作らせ自分の頭髮を植えたとい
ふ和尚の影がある

邦「オイ、奈良電 和尚を一遍電
車に乗せたら、どうだ」

奈「不可ねえ／＼、あの悪口屋の
和尚のことだから必づとまた、文
化機關を罵倒するに違ひない」

邦「お蔭で僕は褒められるな、昔
笠に薪の杖とは、う「愛」い奴う
「愛」い奴つてな、それから何か手
みやげを呉れるぜ」

奈「手みやげなら、こゝには、今
だに和尚遺法の納豆がある、當寺

の名物だからそいつを呉れるだ
らう」

邦「納豆はナツト心細い」

× × × × ×

奈「オイ、見ろ、生駒の山が見え
るだらう、こゝから生駒へ出るの
も近いよ」

神功皇后陵、成務天皇陵、垂仁天
皇皇后陵、稱徳天皇陵、平城天皇
陵、仁徳天皇皇后陵、などの御陵

及び秋しのの雪ほの白し鷹の鈴
(支考)の歌で有名な秋篠寺があ
る、平城を過ぎ西大寺、京都から
此處までが二十一哩五分、こゝか

ら大軌電車に乗り入れ油阪を経
て奈良に向かつてゐるのである。

邦「オイ、早く奈良へ行かうよ」
奈「そう、喧しくいふなよ、俺れ
には軌道といふものがある。軌道

にはカーブもあらアね人間並み
に行くけえ、今、カーブを曲つて
あるときさ、——ポー、ピー、ポ

ー——さあ、行かう」
奈良には百人首の鬨秀「けいしゅ
う」歌人が出迎へて、早速奈良電

へ羞かしさうに檜扇を傾けて握
手を求めてゐる。皆片手に短冊を
持つてゐる。開通祝ひのことぶき

の和歌を書いてあるらしい、こつち
にあのサラリとした文字が讀め
ないから文句も分らない。僕を見
て

「この人は何人ぞかし」

と聞いた、奈良電が漫ぐわの邦坊
だと説明したら、檜扇のかげで
「ホホ……………」

と笑つた。その玉を轉がすやうな
鈴を振やうな嬌音の可愛らしさ
つたら——ウーイ、堪らなか
つたぜ。

邦「オイ、とに角、おやぢに會ひ
たい」

奈「おやぢつて一體誰だ」
邦「大佛ぢやないか、奈良の大佛
さんといふぢやないか、あいつに
會ほうよ」

奈「口の悪い奴だね、まあ、軌道
を外して行かう」

東大寺の大佛殿、いかさま、お
やぢ居よる。

邦「馬鹿に大けえな」
奈「身の丈け五丈三尺、面の長さ
一丈六尺、掌へ六人は大丈夫座れ
ます、え、こちらへどうぞ」

邦「おぬ戯談ぢやないぜ、しかし
に篋棒に大けえ、オット、僕はお

やぢに傳言があるんだ、待つてく
れ」

山肌の褰のような大佛の腹の
上を攀ち上り、みづおちの谷間を
辿りながらやつと坦々たる平地

に達した、こゝが肩らしい、富士
山の斜面見たいだ。そこでヤツト
コサと、憩ひの汗を入れて、さて、
一服煙草を喫んで、心安く、

邦「大佛さん」
と呼ぶ あまり顔が大きなの
で眼や鼻やらさつぱり見當がつ
かん すると

「何んだい」
と太い確かりした聲が聞える、
どうやら大佛さんの聲らしい、

邦「あなた、何時も一遍京都見物
がしたい、といつてゐたさうです
ねえ」

「いかにも、一遍京極や円山へ
行つてみたい」

邦「しかしな、大佛さん」
「何だ」

邦「そりあ、やつぱりあきまへん
わそれをこの間京都の人から傳
言を聞いて來たんですよ、大佛さ
んが、あんなに京都見物したがつ

てゐるけれど、あの圖體ぢやとて

も駄目だから、また交通機關完備の暁あなたの身體を入れる汽車でも出来た時来るように言つてくれ、君あんぢよう言ふて来てや、こない聞いて来たんだが大佛さんやつぱりその頃まで、京都行きはあきらめたがいゝぜ」

途中平端な桃林の紅、西に法隆寺の塔が見える。奈良電の説明によると京都から奈良へばかりでなく京都から天理にも又橿原神宮へも直通電車であつて飛ばすのだそうだ

最新式だからといふかも知れないが實際だよ、少しこつちの身にもなつてくれ、旅は道連れ、世は情けつてからな」

邦「奈良電、休んだら駄目ぢやないか、これから花の吉野へ行くんだらう」

しき哀史に色どる「歌書よりも軍書にかなし吉野山」が只今眼前にある。感慨なかるべからず即ち一句なかるべからず。無い、よつてペコンと一つ頭を下げる。吉野山に白玉の露多かれ。以上。

「今度、奈良電車とかいふ、軽

「よう、拂（はら）へ玉へ天理王

ピ、ポー、

邦「おい、そりや困つたな」

快な、便利なやつが出来たぢやないか、あいつで連れて行つてくれ」

のみこと——」『あしきを払うてたすけ給へ天理王命』が正しい」

奈「そりや、うねび山見れば畏し

奈「そのかわり、俺れの兄弟分の吉野鐵道の便をかつて直ぐ行けることになつてゐるんだから大丈夫だ」

僕、上から 下で待つてゐる奈良電を呼んだ。

奈「明治四十四年起工して大正三年までかゝつたこれが天理教の本部だよ、地域八千坪輪奐（りんかん）の美は東西本願寺につぐそうだ、中山の婆さんは偉いもんだねえ。」

と本居宣長の詠んだ畝傍山が見えるだろう」

邦「そうか、それぢやついでだから僕獨りで行かう、ところで、どうだ別杯を交わさう」

良電を呼んだ。

邦「拂へ玉へ天理王のみこと——」

邦「見える」

奈「よからう」

つて行くつてよう」

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピ、ポー、ピー

樞原神宮前、こゝでは彼は完全に脚をとどめた。僕は宮幣殿社の森

邦「君の飲んでゐるのはそら何といふ酒だ」

奈「無茶いふな、なんぼ最新式でもこんな大きな身體乗せたら潰

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピ、ポー、ピー

下げた。東征六年皇威治（あまね）く六号に及んで畝傍山の東南樞

奈「酒ぢやなあよ、電車は酒なんか飲まないよ、油さ、車輪へ注してゐるんだ」

れて了ふがな、断つてくれよ」

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピ、ポー、ピー

底つ磐根に宮柱太しり、高天原に氷木高しりて天壤無窮の皇基を開かれた二千五百八十八年の昔

邦「なるほど」

そういつて彼は大佛殿から逃げ出した。僕も飛び降りて

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピ、ポー、ピー

原の地に都を奠（さだ）められ、

奈「では、邦坊君失敬」

邦「おやぢ失敬」

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピ、ポー、ピー

氷木高しりて天壤無窮の皇基を開かれた二千五百八十八年の昔

邦「なるほど」

と、奈良電の後を追つて逃げた

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピ、ポー、ピー

所の一部を賜つたもの度々神域を擴張して只今外苑には大運動

邦「奈良電君失敬」

若草山の温容を後に、鹿の聲を後に、二月堂を後に、あられ酒を後に。

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピ、ポー、ピー

場が設けられてゐる宮前、菖蒲園の五彩の菖蒲は清麗だそうだ。

野口、六曲、上市等を経て終點吉野、一目千本、中の千本、奥の千本の吉野山、南朝四十年、涙ぐま

に。

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピ、ポー、ピー

を偲ばせる。社殿は何れも京都御

これから獨りだ。岡寺、壺阪、吉野、一目千本、中の千本、奥の千本の吉野山、南朝四十年、涙ぐま

奈良電は再び西大寺より

邦「おい、少し速力を緩めてくれ、そりや聞えませぬ奈良電さん

君の脚はとても早いねえ。そりや

と俺をひつばる

と俺をひつばる

君の脚はとても早いねえ。そりや

の五彩の菖蒲は清麗だそうだ。

本の吉野山、南朝四十年、涙ぐま

樋口季一郎中将

藤川卓爾(S42/1967卒)

令和4(2022)年10月11日(火)、淡路島の伊弉諾神宮境内の淡路祖霊社で樋口季一郎中将の銅像の除幕式が行われた。(伊弉諾神宮については京機短信No.315を参照)



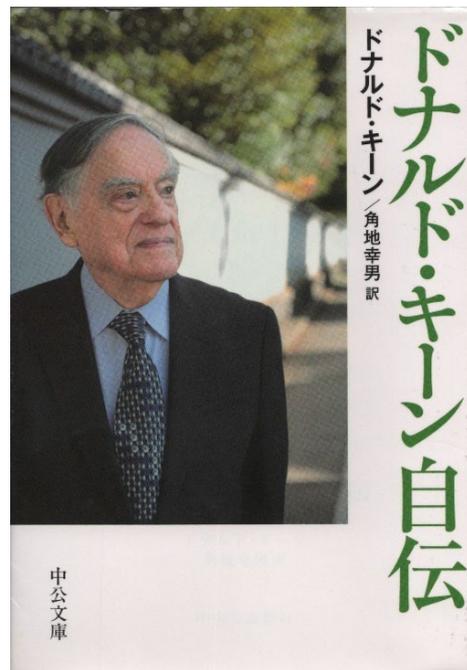
樋口季一郎中将銅像

私が樋口季一郎中将のことを知ったのは、平成27(2015)年11月7日(土)の京都大学ホームカミングデーでのドナルド・キーン氏の講演である。「京都大学時代に出会った人々」という講演の最後は「①アッツ島上陸時の日本軍の自決、②キスカ島の奇跡の撤退 に日本人の両面を見た。キスカ島撤退の樋口季一郎はユダヤ人を上海へ移動することの斡旋をし、東洋の杉原 千畝といわれた。」で締めくくられた。(ドナルド・キーン氏の講演については京機短信No.267参照)

翌年、「歴史街道」2016年4月号で「1943キスカ島の奇跡」が特集され、その中で「ドナルド・キーン自伝」の記述が紹介されている。



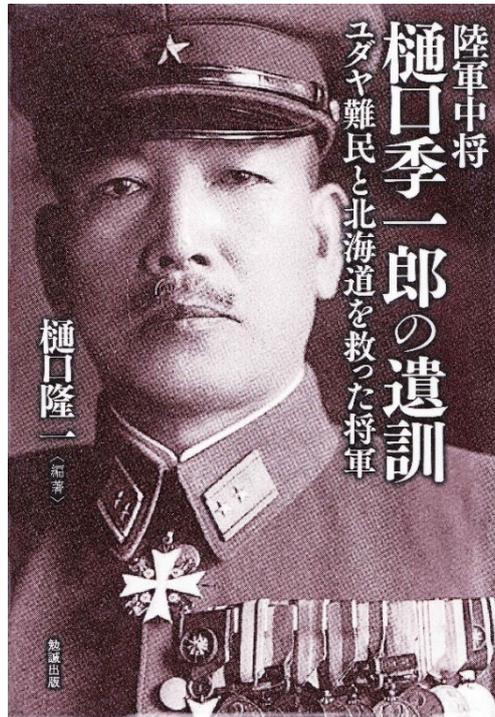
「歴史街道」2016年4月号



「ドナルド・キーン自伝」

ドナルド・キーン氏は米海軍翻訳者としてアッツ島攻撃で戦争の初体験をした。アッツ島は日本軍の最初の「玉砕」の地となった。ドナルド・キーン氏は「日本兵は、ややもすればアメリカ軍を蹴散らしそうな勢いを見せた。しかし結局は勝利の望みを捨て、集団自決を遂げた。多くは自分の胸に、手榴弾を叩きつけたのだった。私には、理解できなかった。なぜ日本兵は、最後の手榴弾をアメリカ兵に向かって投げずに、自分を殺すことに使ったのだろうか。」と書いている。約3か月後に上陸したキスカ島には一人の日本兵もいなかった。この時の経験が講演の最後の言葉になったと思う。

除幕式には樋口季一郎中将の孫の樋口隆一氏が出席した。樋口隆一氏は令和2(2020)年に、祖父の生涯の活動の実績と祖父の遺稿を「陸軍中将 樋口季一郎の遺訓」と題した分厚い本にして世に出している。



樋口隆一氏編著 「陸軍中将 樋口季一郎の遺訓」

この本の「はじめに」で、樋口隆一氏は「祖父樋口季一郎の没後五十周年にあたり、彼が書き残した文章を、こうしたかたちで上梓できることはじつに感慨深い。いまでこそ、ユダヤ難民を救済し、アッツ島玉砕のあと、キスカ島の奇跡の撤退を可能とし、終戦前後に占守島や南樺太の防衛戦を通じてスターリンの北海道占領の野望を阻止した陸軍中将としての彼の存在は、ようやく知られるようになったが、戦後の祖父は、札幌での復員監が終わったあとは、いかなる職業に就くこともせず、小樽郊外朝里を皮切りに、宮崎県小林市、都城市、神奈川県大磯町などを転々としながら、苦労を重ねていた。毎朝、鴨居にかけてあったアッツ島の水彩画に手を合わせる彼の姿は、戦後生まれの私にとっても印象的であった。」と書いている。

銅像の説明文から一部文体・字体を変えて抜粋すると、「樋口季一郎中将は明治21(1888)年淡路島生まれ、三原高等小学校、丹波篠山の鳳鳴義塾、大阪陸軍地方幼年学校、陸軍中央幼年学校、陸軍士官学校、陸軍大学校を経て参謀本部員となり、情報将校として活動し、在ポーランド公使館付武官として世界情勢を学び、昭和12(1937)年ドイツ視察を経て満州国ハルビン特務機関長となり、ソ連との国境付近のオトポールに到来したユダヤ難民救済の道を開いた。昭和13(1938)年、参謀本部第二部長(情報担当)、昭和17(1942)年、北部軍司令官として札幌に赴任、昭和18(1943)年、北方軍司令官としてアッツ・キスカ両島の作戦を指揮、昭

和20(1945)年8月、北海道占領を目指したソ連軍が樺太・千島列島で侵略を開始するや第五方面軍司令官として断固反撃を指示しこれを撃退、日本分割を阻止した。昭和45(1970)年10月11日、東京にて没、享年82歳」とある。

ここで改めて樋口季一郎中将の業績のうち次の3つを振り返ってみる。

(1) オトポール事件

昭和13(1938)年3月、満洲国と国境を接するソ連のオトポール駅で、ナチス・ドイツの迫害から逃れてきたユダヤ人難民が、満洲国に入国できず立ち往生していた。極東ユダヤ人協会代表のアブラハム・カウフマン博士から相談を受けた樋口中将は、南満州鉄道（満鉄）の松岡洋右総裁に直談判して、満鉄の特別列車で難民を上海に脱出させた。

このユダヤ人脱出ルートは「ヒグチ・ルート」と呼ばれ多くのユダヤ人を救済した。有名なリトアニア領事館の杉原千畝氏の命のビザより2年前のことである。



オトポールとハルビン、大連の位置

Google Map より

(2) キスカ島奇跡の撤退

キスカ島はアリューシャン列島の西側に位置する島で、もともとはアメリカの領土であったが、昭和17(1942)年6月にミッドウェー作戦の支作戦として行

われた攻略作戦により、アッツ島と共に日本軍の支配下に置かれ、アッツ島には2,600人、キスカ島には5,200人の陸海軍将兵が送られた。



アリューシャン列島
Google Map より

その後、戦況の悪化に伴いアッツ・キスカ両島はアメリカ軍からの反撃に曝され内地からの補給もままなくなり、昭和18(1943)年5月にアッツ島がアメリカ軍の上陸作戦により陥落した。樋口中将は司令官としてアッツ島への増援を山崎保代守備隊長に連絡した直後に大本営からアッツ島への増援を放棄するという信じがたい命令を受けて、部下たちを「見殺し」にせざるを得なかった。次にアメリカ軍が矛先を向けたのはキスカ島であった。樋口中将はアッツ島の放棄を承諾する代わりに、キスカ島の即時撤退を認めるように上層部を説得した。

最初潜水艦による撤退作戦が実施されたが、敵制空権下で失敗した。そこで、この地方特有の濃霧に紛れて高速でキスカ湾に突入、素早く守備隊を收容して離脱する、という計画が立てられた。收容部隊を指揮した第一水雷戦隊司令官木村昌福少将は事前に次の二つを強く主張した。

- ・キスカ湾滞在は1時間に限り、それ以上経てば救出作戦を中止してでも出航する。
- ・5,200人を効率的に收容するため、陸軍兵は三八式歩兵銃も放棄する。

菊のご紋章が付いた三八式歩兵銃の放棄は陸軍から猛反発を受けたが、木村少将はガダルカナル撤退時に銃を携行したために出港が遅れた例を挙げて譲らなかったため、樋口中将は独断でその要求を容れた。

木村少将は作戦中に、思うように霧が発生しないため突入を延期し一旦引き返して非難を受けたが、結局奇跡的な成功を収めた。

この撤退作戦をアメリカ軍は「パーフェクトゲーム」と称賛したという。樋口中将は戦後この作戦成功の要因を問われ「濃霧、海軍の友軍愛、アッツ英霊の加護」と答えている。「アッツ部隊が余りに見事な散華全滅を遂げたからアメリカ軍はキスカ部隊も同じと考え、撤収など考えもしなかったからだろう」と。

(3) 占守島の戦い



千島列島
Google Map より

昭和20(1945)年8月9日、ソ連は日ソ中立条約を一方的に破棄し、満洲に雪崩れ込んだ。11日には樺太にも侵攻、第五方面軍は各師団に対ソ戦準備を命じたが、15日に日本はポツダム宣言を受諾し降伏、日本軍は武器を置いた。とこ

ろがソ連軍は攻撃の手を緩めず、16日以降、樺太でも満洲と同様の侵略を繰り返した。さらに8月18日未明にソ連軍先遣隊が占守島に上陸した。この報を受け、第五方面軍司令官の樋口季一郎中将は、第91師団に「断乎、反撃に転じ、ソ連軍を撃滅すべし」と指令を出した。日本軍は無条件降伏したとはいえ、自衛のための戦いまで放棄したわけではなかった。占守島守備隊の奮闘は、敵を海際に追い詰めて、23日の停戦に至り、ソ連軍は北海道侵攻を諦めた。

ソ連軍の戦死者は約3,000人。しかし、日本軍も池田連隊長をはじめとする600人が戦死した。捕虜となった日本兵はその後大勢が拉致され、シベリアへ抑留された。

敗戦後、「軍人=悪い人」とされ、軍人の銅像が破壊された。樋口季一郎中将のことも語られることがなく、彼の業績を知る人は少ない。今回の銅像建立は一人でも多くの人達がそれを知るための一助になるのではないかと思う。早速、「週刊新潮」10月27日号に「知られざる英雄」と題する記事が掲載された。

昭和43年(1968年)入学-昭和47年(1972年)卒 卒業50周年記念同窓会

秋山雅義 (S47/1972卒)

2022年10月17日(月)12:30~14:30に卒業50周年記念の同窓会を、京都大学時計台記念館1階のフレンチレストランLa Tourで行いました。東は日立市から結城正美さん、西は筑紫野市から石田啓介さん、の出席を得て、総勢36名の会でした。



5月にZoomでの小規模の同窓会を開いてくれた岡本雅昭さんが、八面六臂の活躍で総てを取り仕切ってくれ、コロナ対策を打った下、楽しい50周年の会となりました。岡本さんが準備してくれたA4で50枚にも及ぶ当日配付資料には、よくぞ保管していたと思われる1968年3月20日の機械系学科合格者発表掲示板の写真(抜粋)に始まり、京都大学新聞の合格者名簿や、翌年1969年1月の時計台を遠望する学部正門封鎖風景の写真(大橋雅夫さん提供)等が続きました。また、当日欠席の同級生からの近況報告メールや、アメリカ在住の絹田秀敏さんがアルバト

ロスを達成したという現地新聞記事、そして奥島透さんが出版した「日本一小さな航空会社の大きな奇跡の物語」の紹介、牧野俊郎さん提供の京都大学機械系の歴史に関する資料もある盛りだくさんな内容でした。宴たけなわの頃に、全出席者に割り当てられた1分間スピーチでは、タイムキーパーの池田博一さんが“チン！”を鳴らすことも多く、参加者全員が想いの丈を語り合ったひとときでした。

聚楽と美しい鴨川

編集人

この目次をご覧になって、鴨川と歴史の話を想像された方々には申し訳ありません。京都の酒処といえば伏見で、今回伏見にまつわるお話を吉田さんに紹介していただきましたが、こちらも京都市内にある酒蔵のお話になります。伏見区を除く京都市内蔵元がつくる[京都酒造組合のホームページ](#)を見ますと「室町時代には洛中の造り酒屋が約350軒ありましたが、現在では この3社が情緒的な京の酒の伝統を守っています」とあります。「この3社」とは、佐々木酒造(株)、羽田酒造(有)、松井酒造(株)で、吉田キャンパスに近い松井酒造さん(左京区)は京機短信No.370で紹介しました。今回は、その次にアクセスがしやすい佐々木酒造さん(上京区北伊勢屋町727)をご紹介します。

佐々木酒造さんは明治26年に創立され、蔵は豊臣秀吉の邸宅「聚楽第」のあった南端に位置すると[同社のホームページ](#)に書かれています。聚楽第の広さは10万5千平方メートル(甲子園球場3個分)もあったと伝えられており、その南端に現在の出水通り(東西の通り)があります。このあたりに豊富に湧き出る良質な水を秀吉や千利休が茶の湯に使ったとのことで、佐々木酒造さんには「聚楽」、「聚楽第」、「聚楽菊」など由来のある銘柄があります。ちなみに、社長の佐々木晃さんは3人兄弟の末っ子で、上のお兄さんは俳優の佐々木蔵之介さんです(なぜ晃さんが蔵をついだかもホームページに詳しく書かれています)。

次項の写真1~3は蔵を訪れたときに撮影したものです。丸太町通りから日暮れ通りに入って上がり、しばらく歩くと蔵の入り口と販売所が見えますが、「こんな街中に？」という場所にあります。ここを訪れたのはこのときが2回目で、1回目は川上浩司教授(京都先端科学大学)のご紹介で越前屋俵太さん(雅号は俵越山)の書展が開かれたときでした。越前屋俵太さんは、編集人の大学生時代にコメディアンとしてTVに登場され、斬新な企画を自身で考え、さらに演じながら様々な番組で活躍されました。現在は、関西大学総合情報学部の客員教授を務めたり、書家として個展をひらいたり幅広い活動をされ、[京都大学デザイン学スクール](#)でも数々のワークショップでお世話になりました。

写真1 丸太町通りから日暮れ通り
(右)へ入る

写真2



写真3



写真4

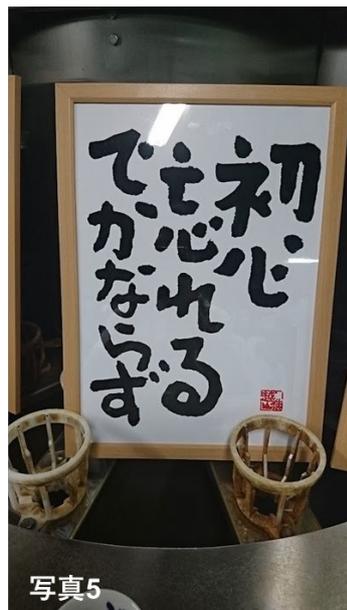


写真5



写真6

「蔵出原書展」と命名された佐々木酒造さんでの個展は、蔵のあちらこちらに展示された俵越山さんの作品をお酒を頂きながら鑑賞するという斬新なものでした。写真4は開会のときの様子（左が越山さん、右が佐々木晃社長）で、写真5はそのとき拝見した書で一番おもしろいと思ったものです。非日常である蔵の中で何かを探す、そこにはまさにワクワクした感覚がありました。越前屋俵太さんの企画はいつも斬新で奇抜なのですが、著書「想定外を楽しむ方法」(KADOKAWA, 2017)や俵越山美術館のホームページを拝見すると、背景でいろいろな思考をめぐらされていることがわかり、その柔軟さにも感心します。

2回目の訪問は、125周年祝賀会のお酒を選ぶためだったのですが、かなり迷った末に写真6の2本を選びました。左は「聚楽」の蔵出原酒ですがラベルは越山さんの書です。「美しい鴨川」は売り上げの一部が鴨川の美化運動に使われるそうです。

(松原)

京機短信へのみなさまからのご寄稿をお待ちしています！！

編集人（京機短信編集委員会）

鈴木基史（S61/1986卒）

松原 厚（S60/1985卒）

蓮尾昌裕（S61/1986卒）

西脇眞二（S61/1986卒）

E-mail : tanshingenko@keikikai.jp